

” 機嫌のよい “ 暮らし方



語り手 柳生 博

Hiroshi Yagyu
1937年茨城県生まれ。俳優座養成所9期生。テレビを中心に俳優や司会業を続けながら、1976年より山梨県八ヶ岳南麓の北社市に住まいを構える。1989年にはパブリックスペース「八ヶ岳倶楽部」を開設、若い芸術家のためのギャラリーや自ら造園した雑木林を一般に開放している。2004年からは「日本野鳥の会」の第5代会長職にある。著書として「森と暮らす、森に学ぶ」、「それからの森」（ともに講談社）、「風景を作る人 柳生博」（辰巳出版）、「和暦で暮らそう」（小学館）、柳生家の掟をモデルにした絵本「じいじの森」（原案、清流出版）などがある。最新刊は、加藤登紀子さんとの対談集「自然を生きる、自分を生きる」（河出書房新社）。

シンガーソングライターの名ナマリさんは、八ヶ岳の森の中で暮らしながら、ライブ活動や音楽制作を行っている。八ヶ岳の自然の情景からインスピレーションを受けて制作した曲を、ボサノヴァのリズムにのせて歌い、奏でる。そんなナマリさんは柳生さんのお孫さんの音楽家庭教師でもある。初対面でありながら、お二人の会話は弾んだ。

八ヶ岳の森とボサノヴァのリズム

柳生 僕は二人の孫からナマリさんの音楽の授業の楽しさをいつも聞いているから、「はじめまして」というような気がしないな。僕は会えなかったけど、去年の2月には倶楽部で弾き語りのコンサートも行ってきたんだよね。

ナマリ はい。雑木林とボサノヴァ、とてもマッチしていたと思います。15年前に甲府勤務となった夫の転勤に伴ってここへ移住してきたときは、これからどうやって音楽活動をしていこうかと思いましたが、杞憂でした。曲の題材は八ヶ岳の自然の中にたくさんありますし、コミュニティが小さい分、人と人同士の関係が密で、ホームパーティーや小さなレストランで演奏をしたり、何かとお声をかけていただいています。

柳生 そういう関係の濃さはありますよね。職種によってはもはや東京にいない必要のない時代だから、どこ

にいても表現できて発信できるし。40年前、僕がここに土地を求めたときは、敷地の前の道を1日に5〜6台しか車が通らなかつたけど、いまは都心からの移住者が本当に増えています。ギターは何人くらいに教えているの？

ナマリ 大人7〜8人とお子さんは柳生さんのお孫さんだけです。二人にはギターだけではなく、歌も教えています。リズム感や感性がとて

いました。あるとき付いてくれたスタジオのスタッフがボサノヴァギターの人で、魅力を知りました。本格的に取り組むようになったのはここへ来てからです。

柳生 ボサノヴァはもともとブラジルという暑い地域の音楽だけど、なんとなく八ヶ岳とも合う気がするな。ところで「BOSSANOVA」ってどういう意味？

ナマリ 「新しい隆起（こぶ）＝ニューウェーブ」というような意味です。日常のことや海（自然）のことを歌ったり、身近なことが題材になっ

ているので、八ヶ岳でも置き換えられるんです。

柳生 30〜40年前に別荘地として人気の出た八ヶ岳が、今では都心からの移住者の憧れの地になっている。知的好奇心の強い層も多いから、ナマリさんの活躍の場は今後増えていくと思います。規模は小さくても、密なコミュニティのなかで経済活動があり、文化的活動があり。今後

良い曲をつくってください！
ナマリ ありがとうございます。これからもボサノヴァのリズムのよ



八ヶ岳倶楽部のステージでナマリさん(右)と柳生さん。

ナマリさんの好きな場所、時間

森の生きものから教えられること

「森の中で音楽をつくる」というと、ここ八ヶ岳の大自然をテーマにした壮大な曲が生まれる、そんなイメージがあるかもしれません。けれどどちらかという私は、自然というフィルターを通して見えてくる、人間も含めた生きものの方に興味を持つことが多いようです。

我が家に遊びに来る野鳥やシカの群れ、タヌキ、虫たち、そして草木の成長のたくましさ。森に囲まれた自宅で、独り彼らを眺めていると、「人間ってなんかヘンなんじゃない？」そう言われているような気がしてなりません。人間が地球上で一番偉いと勘違いしたり、悩まなくていいことで悩んでいた、現代の私たちは大切なことを見誤っているのではと、考えさせられることが多々あります。

森を眺めながら日々そんなことを妄想しては新たな発見をする。そしてそれが時に詞となり曲となり、聴いてくれる人たちに共感してもらえたら、それ以上の喜びはないのです！



最新アルバム
「Sketchbook/ナマリ」
BRSR-CD007